

妙安寺だより 297号

花祭り特集

四月八日はお釈迦様が生まれた日です。宗派を問わず釈尊の誕生日の記念行事が行われます。釈尊は、母の胎内に長いあいだいて、生まれたらすぐに、三步あるいて「天上天下 唯我独尊」といったといわれます。

即ち、世界中で自分が一番偉いのだと宣言されたのです。

釈尊の像は、たくさんの姿がありますが、子供が左右の手で天地を指しているのは誕生のときの像です。

花祭りの行事には、この姿の像が使われます。

像の頭から甘茶をそそぐところから、正式には、花祭りの事を「灌仏会（かんぶつえ）」といいます。これは、釈尊が生まれたとき、九頭の龍が、天から清浄な水を吐いて釈尊にそそぎ、それが産湯となったという伝説にもとづいて、正式にそそぐべき甘露の代用として、甘茶をかけることにしたのである。

甘茶は、ユキノシタ科の落葉灌木で、アジサイの変種だといわれ、その甘茶あるいはウリ科の甘茶蔓を材料として、作られたのが甘茶です。

甘茶というものは、うまいものではありません。

幕末から明治にかけて、江戸の大道芸人が、唄って踊ったという「甘茶でかつぼれ 塩茶でかつぼれ」という文句がありますが、甘茶も塩茶もうまくはありませんが、甘茶は釈尊にあやかる飲み物、塩茶は酒の酔いを醒ますもの、どちらも頭脳明晰と関係があります。

三つのいろいろ

三つのかんしゃ	人には感謝	人の過ちには寛赦（寛大に赦す）	仏には歓捨（喜捨）
三つのがっしょう	手の合掌	声の合唱	喜びの合笑
三つのえんまん	人には円満	自分には捐慢（慢心を捨てる）	仏には縁万（仏縁は限りなく）
三つのいたわり	人の苦勞を思いやる	人の痛みが分かる	痛わり 人に至るところつくす
三つのしんじん	信心は、身を慎む	慎心	心を新たに
三つのしょうじん	商進（商売する人に）	匠進（物を作る人に）	勝進（勝負する人に）
三つのしつけ	身を美しくするのが	躰	人に非礼なのは失敬
三つのさお	洗濯物を干す	竿	りっぱに仕事をなしとげる功
青			とんでもない失敗をして真っ
人生に三つのなみあり	大波	小波	世間並み（あるいは人並み）

花のことわざ

「花を見て怒る人はいない」といいますが、六種供養は六波羅蜜に配され、そのうち、花は人の心を和らげ、怒りから遠ざけるので、「忍辱（にんにく）」という徳目に喩えられます。

花には、「物言わぬ花」と「物言う花」があり、「物言わぬ花」は草木の花、「物言う花」は美女。

昨日の花は今日の塵 世の中の移り変わりが激しいことに喩えられる。

花は折りたし梢は高し ほしいけれども手に入れるすべがない。

売り物には花を飾れ 売り物は見栄えが大事だから、美しく飾れ。

花は根に鳥は古巣に 花は木の根元に散って肥やしとなり、鳥は夕暮れには巣に帰る。

物事はみな自分が来たところに帰るものだ。

「人の花は赤い」といい、とかく他人の物はよく見え、うらやましく見えるものです。

